

## 「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断 —上部消化管」第2版

芳野 純治  
浜田 勉 編集  
川口 実

九州大学大学院病態機能内科学教授

飯 田 三 雄

芳野純治、浜田勉、川口実の3氏によって編集された『内視鏡所見のよみ方と鑑別診断—上部消化管 第2版』がこのたび出版された。破格の売れ行きを示した初版の上梓から早くも6年が経ち、企画の意図は初版のまま、内視鏡写真の変更・追加、新しい項目や症例の追加など内容の充実が図られている。その結果、初版より頁数が約1.3倍に増加したそうであるが、日常臨床の現場で常に手元に置いておくのに適したサイズは維持されており、初版以上に好評を博することは間違いないと考える。

消化管の形態診断学は、内視鏡、X線、病理、それぞれの所見を厳密に対比検討することによって進歩してきた。毎月第3水曜日の夜に東京で開催される早期胃癌研究会は、毎回5例の消化管疾患症例が提示され、1例1例のX線・内視鏡所見と病理所見との対比が徹底的に討論されており、消化管形態診断学の原点とも言える研究会である。この研究会の運営委員およびその機関誌である雑誌『胃と腸』の編集委員を兼務している本書の編集者3氏は、いずれもわが国を代表する消化管診断学のエキスパートである。本書は、“消化管の形態診断学を実証主義の立場から徹底的に追求していく”と

いう『胃と腸』誌の基本方針に準じて編集されているため、掲載された内視鏡写真はいずれも良質なものが厳選されている。また、内視鏡所見の成り立ちを説明すべく適宜加えられたX線写真や病理写真も美しくかつシャープなものばかりである。

本書では、第1章から第3章までが「消化管内視鏡検査の基本的事項」、第4章が「所見からみた診断へのアプローチ」、第5章が「生検組織診断の基本的知識と考え方」、第6章が「内視鏡診断と治療に必要な基本的知識」によって構成されており、これから内視鏡検査を始めようとする初学者から、かなりの経験を積んだベテランの内視鏡医まで幅広く役立つ内容となっている。

特に、全体の約75%の頁数を占める第4章は本書の根幹部分と言える。この章では、咽頭・喉頭、食道、胃、十二指腸の部位別に、各所見ごとに鑑別すべき疾患の頻度、所見のよみ方、基本病変における鑑別診断のポイント、典型写真・シエマなどが示されており、個々の所見についての全体像がまず把握できるようになっている。そして、次頁からの見開きの左頁は内視鏡写真2～8枚とその右端に所見が記載されている。見開きの右頁には、内視鏡写真のシエマと、X線、超音波内

視鏡、病理肉眼・組織写真など診断の参考・根拠となる写真とともに、診断名、疾患の解説、治療方針が簡潔に記載されている。したがって、最初に左頁の内視鏡写真のみを見て所見のよみ方や診断の正否を確認することができ、消化器内視鏡学会の認定医試験の受験にも役立つように配慮されている。掲載された症例は、ポピュラーな疾患から比較的まれな疾患まで多種類に及んでおり、日常臨床で診断困難な症例に遭遇した際などにも本書は大変有用であろうと思われる。

近年、食道癌と胃癌に対する内視鏡的治療が普及するに伴い、正確な深達度診断の重要性が求められている。そこで、本書では、新たに食道癌と胃癌の深達度診断の項目が加えられた。肉眼型別に内視鏡写真を呈示しつつ、X線所見や病理所見との対比という視点から解説されており、形態診断学の真髄にも触れることができる内容となっている。

このように、本書はすべての消化器内視鏡医にとって、大変参考になる必携の書と考える。

● B5 頁432 2007 定価12,600円  
(本体12,000円+税5%)

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)